



オペラのあり方を示し 日本に根づかせた大指揮者

マンフレット・ グルリット

指揮者・作曲家

1890 - 1972

Profile

1890年ベルリン生まれ。16歳にして歌曲集を発表、ピアニストとしても活動開始。1914年ブレーメン市立歌劇場首席指揮者、24年には同劇場GMD(ゲネラル・ムジーク・ディレクター)の称号を得た。ナチス政権から逃れて39年に単独来日。旧・中央交響楽団常任指揮者、藤原歌劇団常任指揮者、東京声専音楽学校教授を務め、72年に亡くなるまで、日本音楽界の発展に尽力した。作曲家としてもオペラ『ヴォツェック』『ナナ』などをはじめ、幅広い作品を残した。

19世紀末のベルリンで育ち、10代から頭角を現し、リヒャルト・シュトラウスの薫陶を受けた。弱冠24歳でブレーメン市立歌劇場首席指揮者に就任するなど、若くして活躍しながらも、ナチスに追われて来日。黎明期を迎えていたわが国に、オペラそして音楽の何たるかを知らしめ、育て、根づかせた、いわば「日本音楽界の父」である。

戦前ヨーロッパの 一流歌劇場で活躍

19世紀末をベルリンで過ごし、6歳からピアノを習い、9歳で『魔笛』[モーツァルト]に出会ってオペラの道に進むことを決心。10代後半にはベルリン王立劇場(国立歌劇場)の副指揮者となり、大作曲家にして大指揮者だったリヒャルト・シュトラウスの助手として指導を受けている。その後、24歳にしてブレーメン市立歌劇場首席指揮者、さらにベルリン国立歌劇場、ウィーン国立歌劇場の指揮者を務めた。作曲家としても、オペラ『ヴォツェック』、『ナナ』をはじめ、管弦楽曲、室内楽曲、歌曲など、幅広い楽曲を残している。これが、日本の音楽界の基礎を築いたマンフレット・グルリットの、戦前までの略歴である。早くから経験と地位を重ね、作曲の才能も含めた「音楽家」としての能力は、師匠のリヒャルト・シュトラウスに比肩するものだった。ちなみに大叔父にあたるコルネリウス・グルリット(1820 - 1901)も作曲家で、歌曲、オペラ、交響曲など多くの作品を残しており、現在では「初歩者のための小練習曲 Op.187」や「24の旋律的練習曲 Op.131」などピアノ初心者にむけた練習曲がよく知られている。

ナチス政権が生まれたことで、ユダヤ系だったグルリットは時代の波に翻弄されていく。1933年にナチスに入党したが、1937年には党員資格を剥奪され、その時期に東京音楽学校(現・東京芸術大学)からの招聘をナチスに妨害されたことで、祖国から逃れることを決意。近衛秀麿の尽力もあり、1939年に来日が実現した。



グルリット在日15周年記念グランド・コンサート。(1955年2月28日、日比谷公会堂)

グルリットは来日直後から演奏、指導の両面で精力的に活動を繰り広げ、中央交響楽団(現・東京フィルハーモニー交響楽団)常任指揮者に就任し、東京音楽学校で指導を行った。1941年には藤原歌劇団常任指揮者となり、1942年『ローエングリン』[ワーグナー]など戦時中も演奏を続け、同団で共演している下八川圭祐の東京声専音楽学校で教鞭も執った。戦後も、藤原歌劇団(1946年の同団再出発公演『椿姫』[ヴェルディ]でも指揮)、二期会などでの活動で、日本のオペラの発展に多大な功績を残した。1947年の東京声専の仮校舎での再スタート時には藤原義江らとともに講師に名を連ね、1952年には「グルリット・オペラ協会」を設立、私生活ではソプラノ歌手、日高久子と結婚した。



声専でのグルリット。右端は創立者の下八川。(1948年6月20日、東京都中央区立泰明小学校内仮校舎)

苦難のなかで 日本オペラの基礎を築く

戦後日本における生活は安定するものではなく、経済的には苦しかった。また、黎明期における日本のオペラ界と、ドイツでGMD(音楽総監督)まで務めたグルリットとの差は大きかったのも事実である。

グルリットはそのような葛藤を抱えながらも屈することなく、大指揮者・指導者としての使命感を持ち、その責務を果たし続けた。『ドン・ジョヴァンニ』や『魔笛』[モーツァルト]をはじめ日本初演を数多く手掛けており、グルリットがいなければわが国のオペラ界の発展が大きく遅れたことは間違いないだろう。日本のオペラ界がこれから発展しようという時期に、彼の存在は

何より大きいものだった。

「日本のオペラ界は、あの人から楽譜をどのように読むべきかを教わったのです。それまでは、音楽的な勉強はしていても、オペラの楽譜をドラマとしてどう読むかということは、誰もわからなかったのです」(栗山昌良)

後世に伝え、 遺すべき指導と成果

グルリットの指導の厳しさと、音楽性の高さは、その薫陶を受けたものにとっては忘れえぬものである。

「優しい方でしたが、オーラがあり、醸し出す雰囲気がかたもではない、という感じでした」(井田安子)

「教えるというよりも、なにかを感じさせるという先生でした。『音楽を教えることはできない、君が感じるものだ』と身体で覚えさせていく」(星出豊)

「グルリット先生が棒を振ると歌手も全然違ってきます。レッスンは本当に厳しく、泣いてしまう人もいました。ただ、猛烈な稽古のおかげで、皆が画期的に変わりました」(栗山昌良)

「先生は発声よりも、音楽そのものについて教えてくれました。例えばデュエットでは、相手がどういう気持ちで歌っているかがわかればもっと歌いようがあるんだと。すごい先生だと思いました」(菊池清)

世界的な指揮者としての名演の数々と、熱心な指導者としての後進の成長という実績を残したグルリット。彼が本学にもたらしたものは、オペラを超えて「音楽とはなにか」という本質そのものであった。指揮、ピアノ、歌唱、音楽表現法のすべてにおいて、ヨーロッパの劇場の何たるかを示したのである。

さらに、作曲家として遺した重要な作品の数々もある。グルリットという偉人が、曲折があったにせよ、わが国、特に本学で偉大な功績を遺してくれたことは僥倖であった。その作品とともに、彼の演奏と指導の本質を受け継いでいくことは、これからの本学、ひいては日本の音楽界にとっても、より深い探求への導きとなるだろう。

オペラ演出家
栗山 昌良

日伊音楽協会会員/
全日本オペラネットワーク運営委員
井田 安子 (S42年度東京声専卒)

菊池 清 (S39年度東京声専卒)

昭和音楽大学客員教授/指揮者
星出 豊 (S38年度東京声専卒)